



美濃奇觀

三浦千春著
上

ル 4
3132
1



ル 4
3132
1-2

ル
3132
巻 1

島田
藏書

三浦千春著
池田崇廣畫

美濃奇観

明治十三年一月刊行

美濃奇観

新島
藏書
明治十三年
一月

美濃奇観序

も〜ぬ。美濃乃國也。昔〜はあまのつ
たがらり。海とわく隔ちつて居る。いふわら
か〜心多う〜。島⁺嶺^{ニホ}の〜は〜
也。〜〜〜。田〜の〜
りぬ。葉も〜
泉〜。か〜の〜

美濃奇観

序

ル 4
3132
1-2

3132
1

島田
藏書

三浦千春著
池田崇廣畫

美濃奇觀

明治十三年一月刊行

新島田
藏書
明治十三年
一月

美濃奇觀序

美濃乃國也。昔一やまの
名がら。海とわく通る。い
か心多し。島田のそと
地。一平。田。人
り。葉も。人
泉。か。乃

美濃奇觀

序

326

道いさあふ字。はるごう。春を字をばす乃誌
 了とつとをさうら。秋を不破の雲屋了もま
 あふ月と。もそいさふ風^{ミヤビ}流^ヲ士^ヲあぬぬる。
 そのさあふも。三浦の春あ。この帖を
 えささけさ。おの秋を。乃秋。

河^ニ筆^ル了。はるごう。所はるる。岐阜の里よ
 屋^トさるる。おあふ霧川乃なが秋

山

山^トさるる。おあふ霧川乃なが秋
 うづつらふ春も。お心さるる。河
 おの秋も。はるごう。河
 はまりさふ。おあふ乃なが秋。
 山^{カリミヤ}存^ニな^ル船^カさ^カお。おあふ。おあふ。
 山^{イデニ}流^ルさ^カお。おあふ。おあふ。おあふ。
 山^トさるる。おあふ。おあふ。おあふ。おあふ。

小石の音をきく。ては。あはれ。あはれ。あはれ。
 うるさく。うるさく。うるさく。うるさく。うるさく。
 風は。吹く。吹く。吹く。吹く。吹く。吹く。吹く。
 心の。こころ。こころ。こころ。こころ。こころ。こころ。
 の。つら。つら。つら。つら。つら。つら。つら。
 あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 弟。弟。弟。弟。弟。弟。弟。弟。弟。弟。弟。弟。

うら

雨の。あめ。あめ。あめ。あめ。あめ。あめ。あめ。
 十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。
 遠く。あき。あき。あき。あき。あき。あき。あき。
 横。横。横。横。横。横。横。横。横。横。横。横。
 洗。洗。洗。洗。洗。洗。洗。洗。洗。洗。洗。洗。
 ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

あはれをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは

し

し

あはれをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは
おとどけのこころをばやうとていふは

くらやうのむかしは、
 病を癒して、
 どの薬も、
 なす。

くらやうのむかしは、
 病を癒して、
 どの薬も、
 なす。

明治十三年四月 近藤昔女書

我ら美濃入國一、
 長良川の鴨飼、
 帝行幸す、
 長良川の、
 とくまらひ、

書に... 浦子春の君事... 二所... 一巻... 一

國人の... 偏... 度山... 長... 申... 序二

いづれにや可入の世に

片岡の心子書

明治十一年五月 柏岡静夫

片岡の心子書

破五季

暗色を其體に身之清さ

怪月痕は能將整ふ事字

新況赤染所々生韻流

種所列隊十餘被圍得去

負心海也漢新之浪富閑

蘇我多利思小孤子道智乃

酒不歸不歸又江波灘在く人守

唱是赤衣親河史舟去炬光

香水白留以就江波系蘭

長良川親鳥ら心を動海不
代歌詞より尚那長良河

水在續



觀卷上

鶉飼 長良川

美濃 三浦千春著

美濃國長良川を以て其れ福葉山ハ林麓と云ふ川あり
古、福葉川といふ也 末の福葉山の條 下見合をなす 水源ハ同國郡と郡
より出て郡上川といひ武儀郡より藍見川といひ支より
下と長良川と唱ふまうく々墨原川といふ也此川
點多く名物うく諸國に冠たり點多き平其秋の末
つて河瀬の石れ向より成りつり其れ後つていふて

。美濃 奇觀

一

同じくつらぬ獲あつたりたれも水にほめて海やう

どり 卵のまゝなみにうかされて海にまゝ溜りうひあそひつゝとこを沈れ
人よしくこしたるをにうひまきては海にちるきつゝ又ふる結川に
くまを散らひおてるが 今年立春後二十日けつにひきまを成

長して長一寸雨まりれもの川之漸くくま初らるるかくて四月

乃央ハ長三寸けつより丈と夏の間迄才に大つ秋のまゝ

多けりけつに船大りく其長き大小及一物ありノス雖魚を

多みく腹は満ちけつを味殊に美なりく賞まへし長良川

うく漁人獲けつひて結とてけつを獲養こんひてまゝ

けつあつたりけつも獲けつに結の長きけつ待て初夏 陰曆四
月中旬

の頃小く結入喜つてけつを幸秋 陰曆九
月上旬 けつく長き

月は厭ひ暗は待てけつを清く宵暗のけつにけつぬけつに

ふりけつと登りけつにけつにけつに其獲けつに数長良人と七

艘小頼人ハ小艘のけつをけつにけつにけつにナカウツカテ中獲使

き人篤工此人系巴船の袖をけつに篝火 鏡の籠
松明を とてけつに

十六羽 此内十二羽と鶴匠五人にて使ひ
四羽と中獲使のものはあり 各其頭を縄もく摩ツナき

縄ハもくもくひひひひ小き分て鶴匠れも手持ち水けつにけつにけつに

け縄とも縄ともタナハふのけつ匠互に聲け揚ぐ結とてけつにけつに

世俗喃喃語と鶴匠にみ
とこそんより起ま 鶴は結とて逐て打のつむさく水底に潜カッま

さらすのうらぶゆりらうとに物乃葉たれれりも縄と
 つたやまを操りては海を片も少く移る鮎と吐せ
鮎の大おれと三四尾吞たる洲幸りけて一時に之と吐し初夏の鮎小なる時分七八尾を咽に持せ吐る
 たきとくたきとてはうらぶゆりらうとに物乃葉たれれりも縄と
 のぬきもさうも並つて満ちてと見ゆは善好火の影を
 雲と映りて共きれば物となすやあや又けりて
二ヤカリ
 の巻狩りし事おれとてはぬきもれれりもさうと川乃
 しみとぬきとてはぬきもれれりもさうと川乃
 火をもちりし我おれりてはぬきもれれりもさうと川乃

水底謡曲鶺鴒に底を以て舟大ふ 鮎ハねをわく度とあり
 前後左右に遊中しとて百餘乃移るたるはとわけ事い
 入手ぬりては片側と遊つたはゆりらうと見ゆは善好火の影を
 み類と捕くやゆりらうと見ゆは善好火の影を
 走ると討ち縦横散れりてはぬきもれれりもさうと川乃
 移るはさうとて世とまのぬきもれれりもさうと川乃
 かる橋側と去くぬきもれれりもさうと川乃
 改鼻れ橋葉山の麓ありてはぬきもれれりもさうと川乃
 川に悠々ゆりらうと見ゆは善好火の影を

けりつゝ... 山溪と信じて
編提^{サ、エ}... 一盡を傾く... 山伏山のうら...
火の孰は... 櫻の... 明年中一條禪因兼良公當國...
うゝ鶉飼... 年に入東照元和元年... 鶉飼見あり其後尾張乃藩之權大納言義直卿と...
代この... 遊覧... 其他文人詞客力の地は...

委しく藤川記... 又慶長十六

も乃世に... 候秋日犯界來轅停

此地道遙者多云云

美濃國古蹟考云今謂鶉養者以當國為第一故聞遠國雖諸

○凡鶉以使ひく魚を捕... 檀原宮武^神乃
所代... 天皇御製に島つ鳥鶉飼...
う... 書紀神武御卷に天皇欲省吉野之地...
西行亦有作... 取魚者天皇問之對曰臣是芭苴擔之子
此則阿太養鷓部始祖也... 阿太^{大和國宇智郡}人ハ鶉以使
ひ又梁を打く魚と捕... 又雄略御卷云誘率武
彦於廬城河偽使鷓鷄没水捕魚云廬城河ハ伊勢國



寂蓮法師

ひと
ま
あ
ま
火
入
け

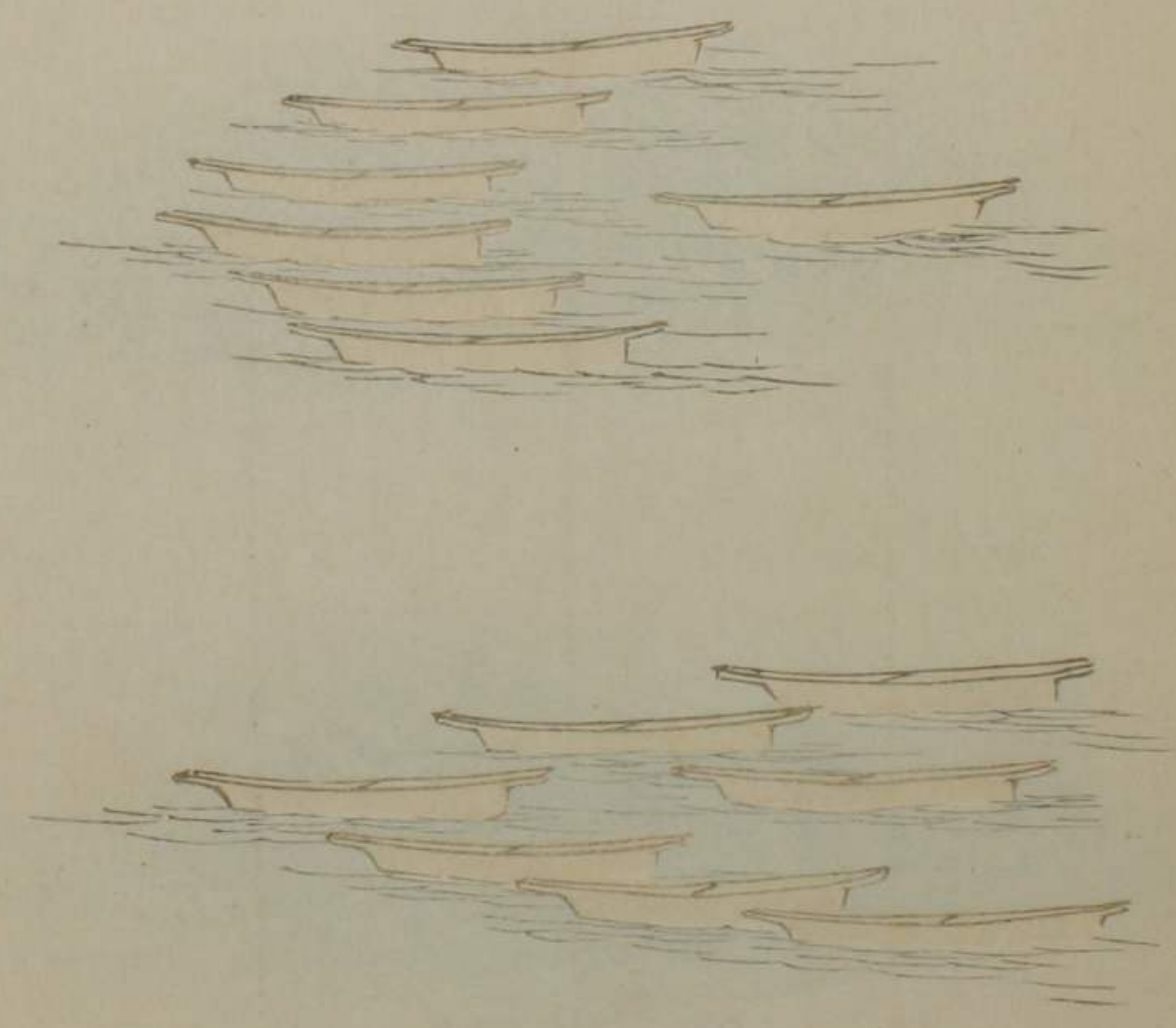
新古今

鶉^{ウカヒ}養^{カヒ}の圖

新
古今
た
り
の
形
う
と
あ
ま
あ
ま
あ
ま

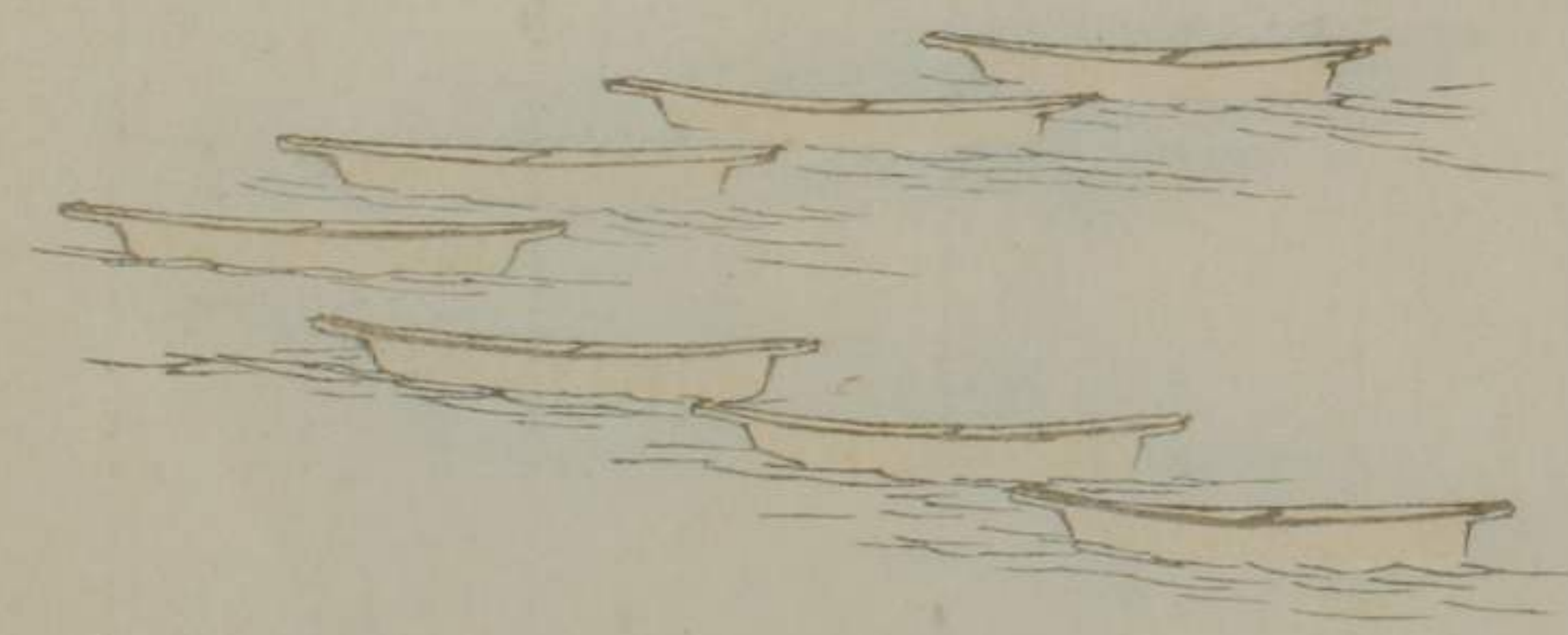


鴉船漕つれて
下も川の位置を
見せたる圖



船乃備へうさゆく
舟の川の廣狹流の
緩急によせて

は圖はそれ大體を
まづとつて



○美濃奇觀

○六

鮎と吐く状



篝小松と
焼く状



鶴を使ふ圖

手繩、鶴匠の左手に
握り持つる

手繩
さく状



鮎吞たる鶴と
むすけ状



箒と前へ
押出と状



箒と
手前へ
ひくゝる状

壹志郡なりとも萬葉集乃可ハ越中國ハ辟田川賣
 比川越前國の叔羅川シロガハに鶉飼ウツクイと云ふ事ありて古、新網
 乃より諸國ふつと多く公には奉る鶉飼をとりて職負
 令大膳職に雜供戸義解謂鶉飼江人網引等之類集解釋
 別記云鶉飼三十七戸やゆ侍中群要に諸國進鶉飼召鶉飼
 云云本朝式に鶉飼四人御厨子所別當預之なり支那の書
 少北史倭國傳曰倭國水多陸少以小環掛鶉飼項令入水捕魚
 日得百餘頭以充食とつてハ皇國力とて侍へりといふ事
 漁隱前集夷貊傳曰余官建安因事至北苑焙茶泛舟而歸

中途見數漁舟鷓鴣五六以繩繫其足攷入水底捕魚徐引
 出取其魚日覩其事又埤雅曰夔州圖經稱峽中人謂鷓鴣
 為烏鬼蜀人臨水居皆養此鳥繩繫其頸使之捕魚得魚則
 倒提出之杜甫詩云家々養烏鬼頓々食黃魚是也予本
 草綱目云時珍曰云々善沒水取魚日集洲渚夜巢林木久則
 糞毒多令木枯也南方漁舟往往繫畜數十令捕其魚之巧
 以此故國之鳥鴉之使也予亦以此記傳十
 九卷に万葉集始々々世の歌を鷓鴣川と詠ふ物法書
 云々此波り々々中音を何処に門也云々此物

此を今れ世を掃く遺物を云々鷓鴣乃名
 新國小多の川を削く其のさ處をたれく残るも
 僅に一二羽の鷓鴣使つても其の美濃國長衣
 川の鷓鴣のさ古く今に傳へてまゝに上件
 川にさあつてはれはるるに十六頭乃れを使
 小舟に絶世の壯觀なりと過たるに云々

近年土木の博物局動物圖鷓鴣の略説小鷓鴣云々之と養ひて捕魚の用に
 供せたり世に此漁と鷓鴣と呼ぶ美濃長良川を以て最有名なり武藏多摩
 川に於て又其業をとも
 美濃の漁と云々

因云々鷓鴣川に名高の川々芳野川大井川桂川

にちつたの程もつけろと云ふに
 と今の人等并務所と云ふ所は
 とも大井桂も云ふ所は
 府の官名も始りて萬事
 舊轍（ニヤ）のもちれ學れ多し
 まもく物も新しと尊む
 是を復古れ世の志
 のも今目前の實景に
 りみ也やと云ふも
 今も
 今も

武藏野の露不破の南乃月
 かけきつりつひく拙者固酒
 あふ人量りてや武藏野
 大宮所こも不破山小
 せなく雨もさゆ川世の
 とひれよはまきつつけ
 ○長良川の勢つたの
 きつりつとも本州方縣
 鶴のつ徒乃住り地なる
 〇十

載りたすむに地名なむくしつて此郷今ハ洞御望
 小野黒野折立古市場今川交人の八村ふつとたり松井
 八澄 鶴養の郷 洞村の人 云古老の夜に昔糸貫川明日焼里 本巢郡中島の古名あり
 乃北ゆく二派にうつ後一ハ今むくく一ハ東南と流れ網代川
 ことにならむとありれ郷に入り三隈村 折立邑の支邑 にて伊自良川と合り
 一ハ 中西郷村の古き村鑑かきしことと誌して糸貫川の中間なる地なるに中島と云き 新とつうして魚と捕
 るもれは 一ハ 又鶴養乃郷の舊記
 と輯録したるものに美濃國新續風土記十一卷にややく
 延喜御時江口里に鶏匠とつてはははる魚とてて献りき

れハつて賞多し云々と記す是ハ上乃古老の記なり
 後乃事と傳へたるに糸貫川流るはは方と流るるとなり
 一ハ 一ハ 便よれ川ふゆて魚と捕
 う終小原見郡江口里に移り住し 以上ハ澄説 ことなり
 今按をふと古ハ長え乃大川 現今の古川筋 早田村北より近島村ふ
 らと流て シツケ 鹿毛村の南へ流るたむく糸貫江口鹿毛なる
 新川と流住 一ハ 方縣郡下鹿毛村と鶴養にあり
 一ハ其村乃木林嘉石衛門 鶴匠の子孫あり こと者人家小所藏する
 豊太閤時代代古證ふととたりははふ天文年中洪水

小て井乃口岐阜の古名乃要水樋と押ぬさ水勢溢るく地
 一派を是と井水川と云ふ其後慶長十三年又法
 水に長良れ堤決て鷺山村の方へ更小川筋ならせ
 通ふ物もなうしう後ハ此新川を古川と砂石高く
 埋めて平水ハ井水川への通ふ物なり是今の長
 良本川と云ふ所尻毛ありに住む新匠ハ天文小川瀬
 変り後漸く長良小居に遷りしなり其又素より此地
 ありのそ其後ハ鶴養乃業と云ふなり今も今も
 たうにハ知るなり

○鶴養の家多と鶴匠といふ方縣郡長良村に七戸
 武儀郡小瀬村に五戸合て十二戸あり古ハ長良に十四戸小瀬に七戸あり
室永中より減して今の慶長乃ころより架せ、連綿相續して
 長良川小瀬に使ひ年魚と取ると業とせむ鶴匠ハ鷹匠に
 等しく武家代小し専ら武人遊獵の具なり也永享乃ころ今
川了俊、記に鶴鷹の道遙と好むと志し、定訓往來に為鶴鷹道遙
欲企参入候之處云云とあり、其れハ一ハハ鶴鷹とあり、ハハハ
 殊にハ川乃鶴養と他に勝るなりハ徳川氏乃治世の始、ハ
 地尾張藩ハ所領小なりし、其其鶴匠と扶持し米金と
 共へて鶴と養立る料と給し、其其鶴匠と扶持し米金と

日本才一也唱つたは凡小頼の鶴巻は上武儀郡
 立花村下は長良村に浪は長良の鶴巻は上小頼村より上
 日よ江崎村まぐ却て川長八九里此河となつたは夜と
 なつてくよつとに持てゆく鶴と使ふは此鶴巻の
 和漢三才圖會に漁人令鷓鴣捕魚魚未下咽時推鷓鴣
 喉則自出鷓鴣常馴知之而不俟漁人手而吐魚亦妙也其
 鶴使久濃州岐阜邊者至巧一舉放十四隻餘國漁人不
 相及やつててははひも鶴匠の巧あるのよはあつと
 との鶴も亦く馴て意のぬくはつてくよつとを奇とつたは

○鶴匠 鶴巻屋 乃家にハ鳥屋を擇(常)に鶴と養ひ馴れて冬春の向

今年の鮭漁終る翌年此漁にけるもの 間とつて廿間一十年の中凡三分の二なり

ハ鮭鮭鮭を喰ふも又一月に西三たつて河流へ移らざるは漁者に魚を捕らむは

と鮭飼ふ一年中務を養ふは旁室小妙うはは佃立る鶴を

常のりまハ形大なり北海 本草正論に南海よりハ誤り北海に産せし鶴の

十月ころ鮭と求めて南海にまゝはつて待て 捕らむ小産を島移つてはは始るは雛と捕へ来ては佃

て漁り馴し其島雛はに用ふるは十六七十年と

命を保つて 近年ハ食鮭の十分よりなるかや 十ヶ年の漁役に堪るも稀なり

尾張の知多郡師等北南より篠海ゆく十一月下旬は海中の

巖上モチ繡とつるが二羽の梅のモチ睫と総てあまると四アりて捕るあり

若し邊に捕獲する時ハ仔細ありありも到るるなりと和名

抄云鷓鴣シノトドリ大曰鷓鴣日本私記云小曰鷓鴣俗云具原氏乃大和本草

に和名抄の説非ありと云ふなりて本邦乃人語と字に誤ハ誤なり抄に

別の鳥ありと云ふ按これに和名抄鷓鴣の大いふと鳥つ鳥と一説ハ當らば

也私記のよ既に誤りありと云ふなり書紀神武紀に鳥つ鳥

と云ふ鷓鴣の枕詞なり其説冠辭考に詳なり

○若し長良川の外と物飼ありと云ふ赤保衛つ乃家集

尾張へりりしに七月初日ありありと云ふなりと云ふこと一は

と云ふ

いづれ乃終つてふも次は火と水なる乃乃終つてを

このり備門と大に匡衡乃妻は匡衡正曆中尾張

權守に任其國にありと云ふなりと云ふなり

秋のふへと株瀬川の美濃國赤坂乃驛れ赤に流る

川あり長良川は水脈別なり株瀬川昔の流ハ大野池田西郡

ありは分派たりなりより呂父川やたういふ合流

も昔ハ赤坂と株瀬川の宿やついでなりと云ふなり東鑑寛喜四年の條

於株瀬川驛被施干往及浪人等云々と見え源平盛衰記の大政大臣師長公

尾張の井戸田へ下向の條に株瀬川にきこゆると云ふなり

昔はこれありと云ふなり終つて使ひてなれと云ふ正曆は

鶏匠手繩

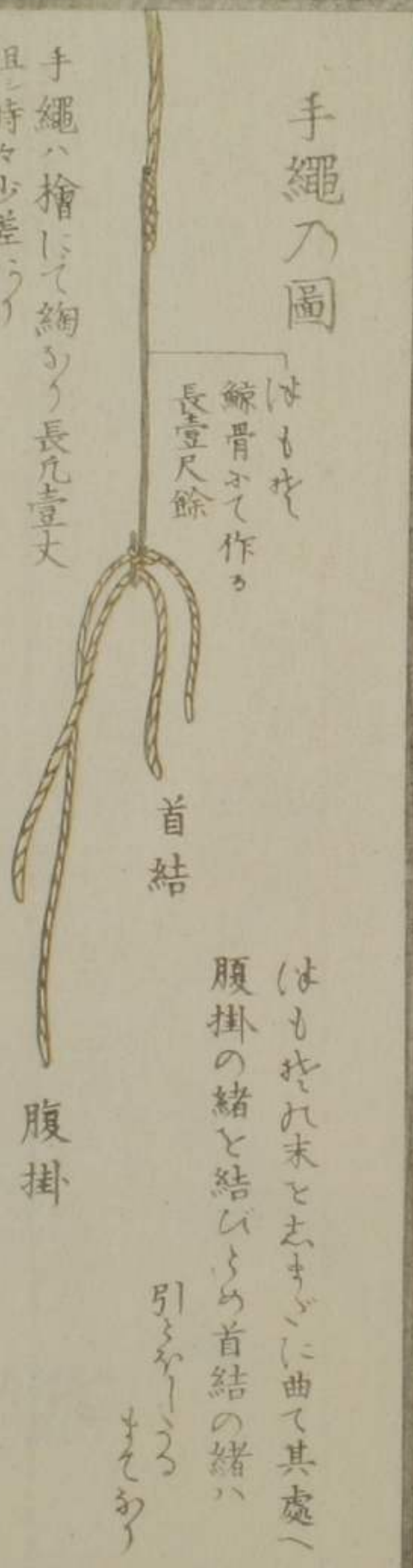
持たる圖



鶏匠ハ長三尺餘の布にて頭と包ミ前小て
結ハ又胸當とふハ腰簀と穿た

吐籠 口徑壹尺三寸
深壹尺貳寸五分
此籠(鶏)の捕たる鮎と
吐らるなり

手繩の圖



手繩ハ槍にて細り長九壹丈
但し時々少差なり
夏の初未鮎の小り長九尺に中
壹丈に末ハ壹丈大壹尺ハも

はもや
鯨骨にて作
長壹尺餘

はもやれ末とまきくに曲て其處ハ
腹掛の緒と結び首結の緒ハ
引か

鷓鴣の圖

鷓鴣ハ能水に潜巧魚と捕
捕魚漁に用るハ北海小産
鳥鷓鴣といふれ常の鷓鴣ハ形大
なり凡首尾の間背の長貳尺許
頸長く咽喉の中八九寸あり
全身の重目ハ百五拾目其小



△六百五拾目以上のれりてハ用と為
こつ魚が出るハ頭と細き麻繩にて
約吞たる鮎腹掛(下らぬ中)に
たきて吐らる

美濃 奇觀

十五



第一圖

第二圖

漁と為んとも時前
 圖に見えたる手繩の末
 つもとに引通したる左
 絢の麻繩かて鶴の咽と
 約ると首あしとつと此と
 加減に手心ちて又此とに
 繋げたる右絢の麻繩かて
 鶴の胸と翼の下へかけて練
 と腹掛とつと両所とも脊にて
 カタコシに結ふ
 其状第一圖の如く
 腹のつとより見る形状
 第二圖の如く



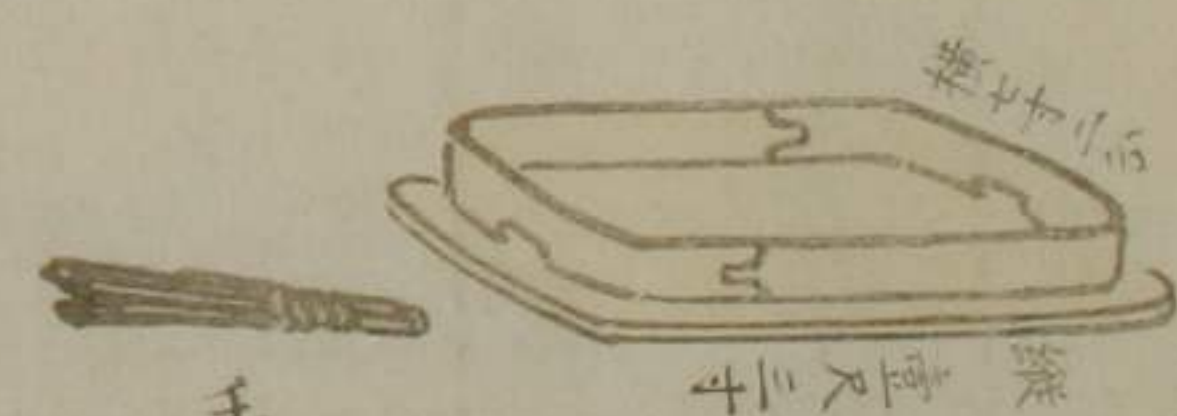
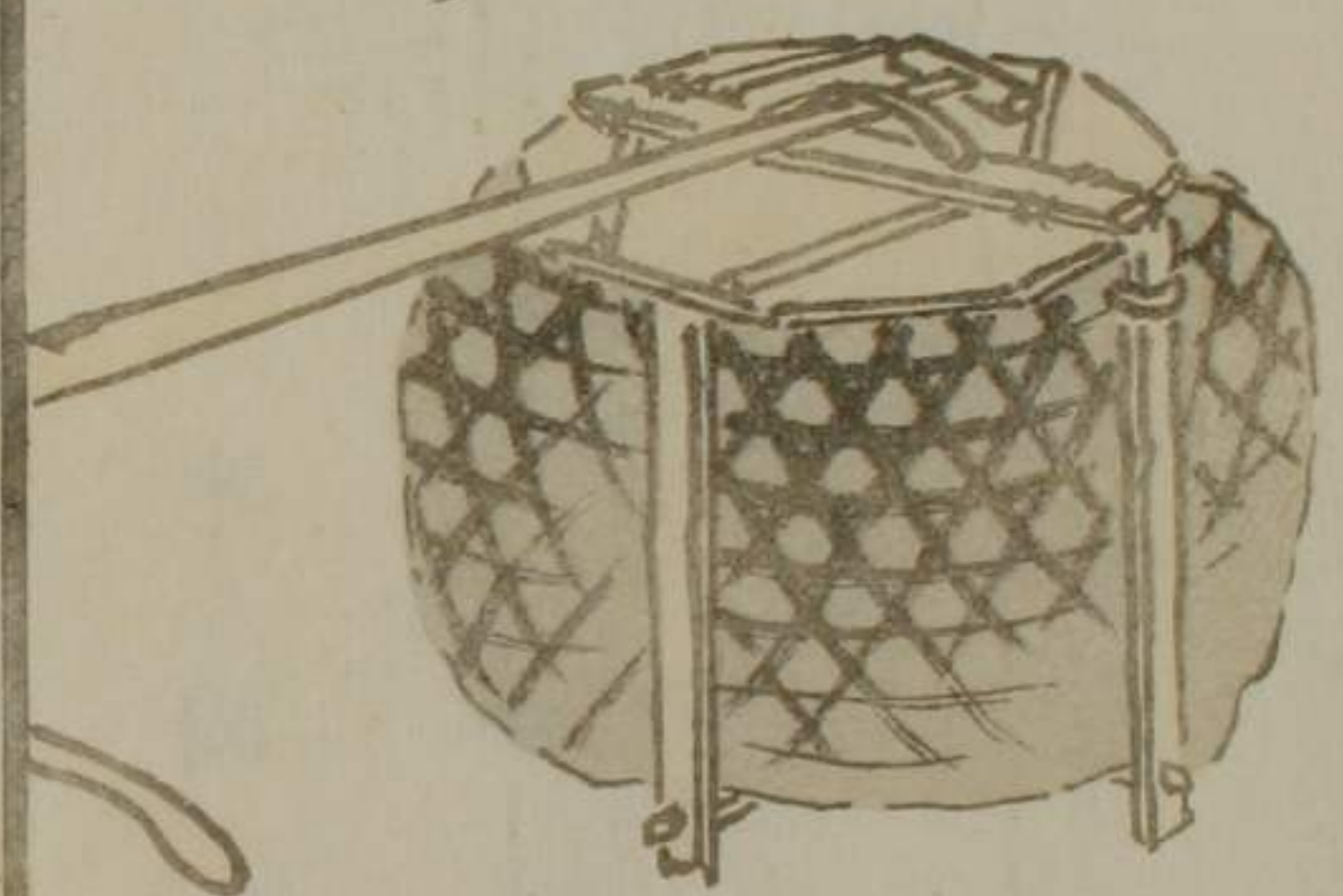
第三圖

第四圖

第三圖ハ鮎と啄て
 燕下も状
 第四圖ハ鮎と啄て
 吞か便りし
 時ハ嘴にて列
 らけくつ直
 のミ入るこつ
 其状とさ

鶉籠之圖

鶉と此籠に入てもちまふ
 径貳尺三寸
 深壹尺五寸
 謡曲鶉飼小
 鶉かこひひこ
 こまこまこまこ
 くれりり

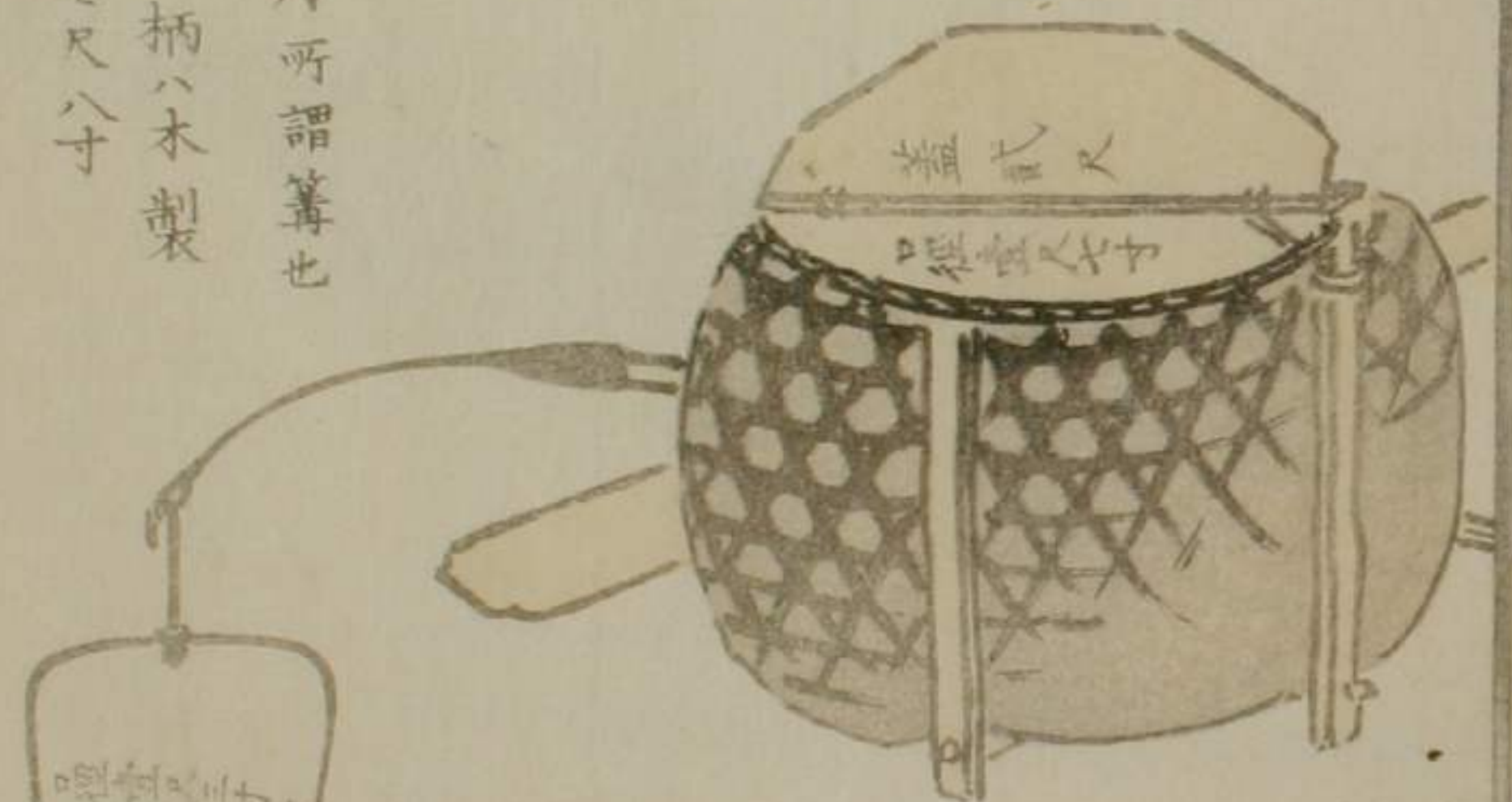


諸蓋
 鮎と盛器

手松明

○美濃奇觀

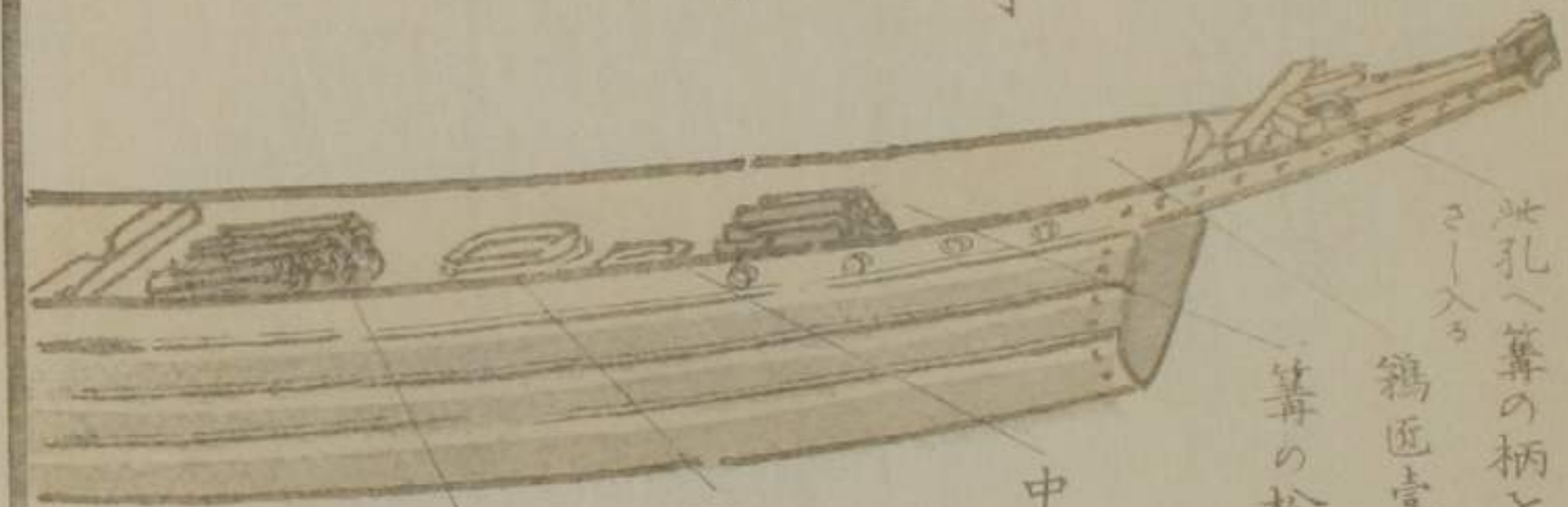
カコ タイマツ
 籠 松明 所謂篝也
 鍍製柄八木製
 柄長七尺八寸



新ハ雌松ノ
 割るる也
 深壹尺
 〇十七

鷄飼船
の圖

船身
長五間五尺五寸
中央ニテ
横三尺四寸
敷貳尺九寸六分
深壹尺六寸五分



此孔へ葦の柄と
こゝへ入る
鷄匠壹人此所にて在て鷄と使ふ
葦の松木

中乘壹人此所にて在て棹擧と操る

鮎と盛る
諸蓋

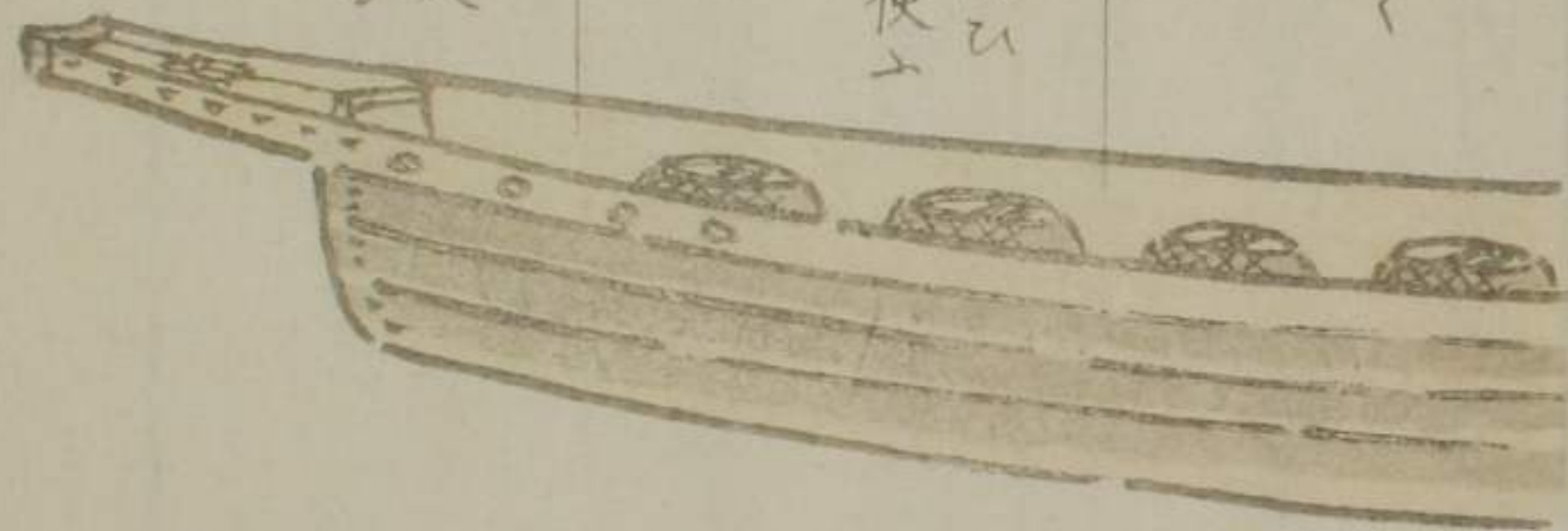
葦の松
と積置
ふり

棹
木品
柂

鷄籠と並へ

此所に中鷄使ひ
壹人ありて鷄と使ふ

此所へ籠來壹人
在て棹擧と操る



擧
木品
柂

中乘用
棹 長九尺五寸
擧 長六尺三寸

籠乗用
棹 長壹丈三寸
擧 長七尺五寸

一條院乃内宇今より八百八拾餘年乃切りしあり美
 濃國乃鶺鴒のつとと證もれ小足れ又平治物語
 源頼朝都落青墓下着乃條に頼朝ト小平乃つと
 と通里たといふれう人目と修ト身なりしつと道ゆ
 りぬ谷乃よけさあなせり所一可にある鶺鴒と違ト
 なるに外に情ありて人目と志の所事トと侍ト居せりた
 まに作ト作トへつとへき市志の所へ送るト居きまトつと
 尸つとあつれまにわさそ青墓へつとやトこトおトも
 とのつとあつたつとあつた美濃の青墓に到るト

乃向くくつとくつ川の鶺鴒なりし也

○堯孝の富士紀行九月十二日此條にもつと川ハ真多
 かの所のう海ありし梨川の面つとつとつと海行つとつと
 ありて侍と舟楫つとつとつとつと人征馬の舟トな
 一ありてありつとつとつとつとつとつとつとつと
 かつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 鶺鴒舟ありし見し侍一年北山殿に行幸のつとつと他
 鶺鴒舟とつとつと桂人トとつとつとつとつとつとつと
 ありつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

のちてと見ゆは物ぬりたにあら

海は鳥居よりうらまをたてて流るぬも偶にと流るぬ

たてのむらむらとせられたりてあはれものおもひけりうらまをた

てあはれ墨俣川スミエガハの長良川の流下流のたつねをたつて流るこの紀行は永

享四年足利義教將軍富士登覽乃道の記なり永享四年

今明治十一年まで
四百四十七年なり

○兼良公の藤川記に云江口よりつらね根津國にゆく
同記よりこれと遊女おやといふことありてはたつねの
たつねとつねを同く

鴉のひらねはふさふさ飛ぶあはれものもあはれもの
十七日ゆりの見ゆへあはれものぬりてはたつねと
はたつね六艘の船を算よりてふたつね一艘とまうりて
とにあらはれ物すあはれものたつねの上をくま暗にすれ
捕らぬものとあはれものつねとて

ゆつねにやとつねを乃算りのあはれものおそく
鴉の魚と捕らぬものとたつねのたつねとつねとつねと
はたつねとつねとつねとつねとつねとつねとつねと
うらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまの

まゆらり粉のまきたる鮎とわら火くし初うて賞殿とん
とわら焼中いおしけうたをい

こやあぬ夜川の鮎のわら焼うけさ見ゆめくわら
こやあは時代の鏡鳴や江は地つたう長え川と江
村の西南と伝とたきぬけうふ江とわら焼と見あり
今れあ〜りれは流るに〜てやて見る〜

○鶉の古寺萬葉集卷一大御食に仕まつる上は
瀬に鶉川と立下つ瀬に小網サガり〜同卷十三に上つ瀬
小鶉とまつつたき下つ瀬に鶉とやはうけ上は瀬の鮎と昨

〜見下つ瀬に鮎と昨〜同卷十七に年魚トビ走る夏



盛島は鳥鶉養うとてさゆ川乃清に瀬〜に篝り
みはさいのぼる同卷十九は河の瀬小年魚トビ兒さ〜鳥島つ
鳥鶉ういささ〜わら〜あはすいゆちハ〜詠でさく
この長え川の鶉とよさゆ寺也代の集り〜た〜心
さ〜あ〜

老の本曾越
波車川の鶉をわらに見えゆとね 細川幽齋
あ〜は〜さ〜さ〜い〜い〜の〜と〜さ〜ら〜川上

みの岡長え川の鶉をわら 本居宣長

鈴屋集
鶴うしあつたはやくにふつふつとひらきふくたのち

長良川の橋何はゆるき 岩倉具選卿

さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき

あゆみの川流とのぼる路に 千種有功卿

なう河橋のまきけりおのりも傾けあるりゆへにけり

名所鶏河 香川景樹

桂園一枝
の那さきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき

清思やうしあつたはやくにふつふつとひらきふくたのち

岩倉具選卿

大館高門

岐阜道草
かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

長良川の橋何はゆるき 植松茂岳

家集
さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき

本居豊頴

うささささささささささささささささささささささ

長良川さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき

乃志やうささささささささささささささささささささ

華火をささささささささささささささささささささ

あつたはやくにふつふつとひらきふくたのち

此所は小瀬と長瀬
と名づつ小瀬の
舟母のたぐひ
二十一社あり

船十と重なるに往所をなする船母のたぐひ
ゆく香晴乃りては船母のたぐひ
て人よまをれとも諸君も書けり一筆に
かつぬいふ夜乃りては船母のたぐひ
おとひさやまのたぐひにひきかき
この外にも尋あり二天保十四年九月尾浪彦乃鴉
遊覧の記あり

佐都伎の日記
鴉乃ひれ母あふひいりて一里ありりよあり小瀬や
つよありては船母のたぐひ

人酒青なる船に持たまはるありては船母のたぐひ
つよありては船母のたぐひ
上乃のたぐひをいふは船母のたぐひ
のつよありては船母のたぐひ
ゆりては船母のたぐひ
もへては船母のたぐひ

栗田土満

く佐まろし船乃なる船母のたぐひ
長え乃りては船母のたぐひ
山乃とれ月まろしと鳴はる鴉乃ひれ

美濃奇観

二十三

ことばあしひの山のついでよりあひ乃やふはまねそまらぐ
 ことばをくはふはるるまて入るあふくはねよひしにのり
 けりまをふちやに難やけのつらくおのつち持縄くま
 清れぬ乃あゆとくまのつらに難とらじとゆい水力
 門をよし倍にたけ乃のゆぶつゆいまははるるまはま
 清安まよりまことどのよりまのあはるるまはまより
 の中凡ははれふそあしれむまらふまらふつれ何のあし
 たゆまやまらつわをまはるるまはま

観長良川鴉養作歌 並 反哥

秋原 廣道

菅の根のなうれ何の上は瀬ふ舟のわし下は瀬
 舟をくはふなうれくるまはるるまはるるまはるる
 上津瀬乃難とくまの先下は瀬乃難とくはるる清
 あまれと見れははるるあまのれ難とくまのあまの目
 海はつらつらつら難れはるる水底のまよまよのまよ
 つゆをたうひまうつまよまよのつゆく持縄とくま
 うまのあれちやかくつらつらつらつらつらつらつら
 づまのつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

一 鳴津より移りていふはち大町に世々まばら
とりの子乃長女の川乃何水のりて居りて
大川儀小舟のりてつりて乃移りて居りて
長谷川より東やちひかりて居りて
題志す

度會弘訓

うみとちとてこれ鳴津はち
りて居りて居りて居りて居りて
ハカとて居りて居りて居りて
瀬乃船とて居りて居りて居りて

繩くちて分て船きほひりて居りて
りて居りて居りて居りて居りて
志す居りて居りて居りて居りて

○貞享元年芭蕉庵桃青波鼻にありて鶴洞の今
りて又十八樓の記とて居りて居りて
口に階多きとて今ちふ記す

十八樓記

美濃乃國なりて川に臨みて水橋ありて
こころ伊奈波山後たりて乱山西より居りて

。美濃奇観



二十六

長良川眺望の圖



稻葉山



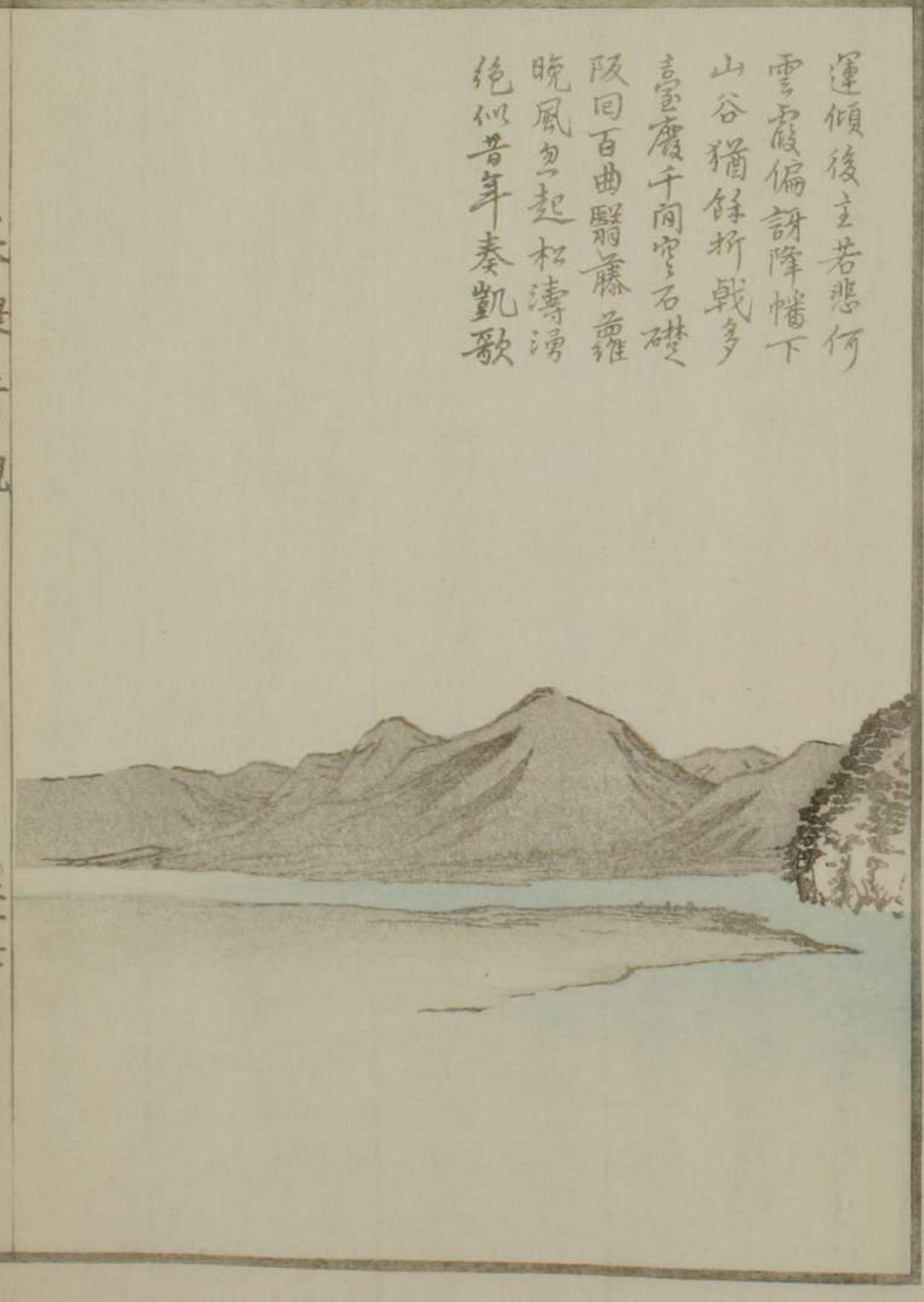
岐昇城懷古

木下順庵

日本詩選
殘壘荒隍積水阿

運傾後主若悲何
雲雨嚴偏訝降幡下
山谷猶餘折戟多
高臺廢千間空石礎
阪回百曲翳藤蘿
晚風忽起松濤湧
絕似昔年奏凱歌

○美濃奇觀



○二十七

寺の遺蹟の次田中の寺ハ枚の一むにうき居り
 下民家と作れうのみを虫と保しり布衣に
 引く右のつらぬりぬ里人の住みきりく漁村
 をあててりぬ釣たるたのつらぬにたは樓を
 もくすふ似るききうさ夏れ日をもくすもく入日
 新し月つらぬはむとほきり中火のうけちち
 かりてつ桐のつらぬにたはひもくすもく
 なむつらぬ浦洞のハのあつと西湖の十れうひも
 味のつらぬにたはひもくすもく居り樓に
 つらぬもくすもく居り

十八様ごもつらぬはや

ま乃あつとあつとふりゆるまねいさなまじし こそは

こハ貞享五年付夏の作るれう又新洞の白ハ

西白うてをかくうねうき鶴とまね こそを

もくすもく居り此川乃あつとあつと 全

○鮎アユノシ濃陽志略云香魚國俗用鮎アユ字岐阜製鮎アユ以充アユ

方物アユ送アユ為岐阜名産アユ

按てはに香魚本草に鮎書紀万葉に細鱗魚年
 魚なりし書然ふ小和名抄とく見えて後人鮎の
 字を用ふるハ神功皇后三韓を討りハてて松浦縣ふつてま針をまけて釣
 とたと我も財の國を得むと事あるとありハ川の魚釣とくどうけひて竿とあ
 け久ハ年魚とくを占つたの故
 事にもくすもく居り大和本草に沙川の鮎ハ小にして

瘦大石多に大河あるは苔をくし大にいて肥とつるり
長え川は坂阜より上へ石多しこれ川筋も多し
の川乃鮎最モよろし美濃明細記云長良より三里川上
を小瀬川とつし此所の鮎頭小く背大に丸故に小瀬丸と稱を
大概より鮎七八寸重百目より大さある稀ものも長
壹尺壹寸重百八九拾多ありて天正中美濃國主土岐家
あて後藤才助本業郡馬場邑の人の命して長え川の鮎に
て鮎スレを製らし遠くへ候に贈りしこれ坂阜鮎鮎の
鮎鮎ありし其後方物として元和元年より將軍家小

獻し始し同五年この地尾張藩の封内やありしを
甚藩より坂阜に鮎所と定まりしを製ししと年々
恒例し幕府へ供せしむるに小鮎鮎ハ初夏の
ころに若鮎あり他よりしと多し此鮎鮎と他より類を
名産せし世にせしむるを祈りしなりし也
延喜式内膳式小諸國所貢年料美濃國鮎鮎隔月三缶
火干年魚一擔八籠鮎年魚四擔八壺やるえなまし鮎
乃鮎も古きしにし

鮎腸鹽アユノタマカラ辛ハ俗に宇留加やうし風味しし新撰美

濃志云支那の書に鯉鯪とありものや製方同く年
魚乃腸又子を取て鹽に藏めて四方に鬻くわうと云

○稻葉山ハもゞ金華山と稱と改阜れ東にありて西の
麓ハをわく市街に接たり南の尾に西にきて石垣
高く築き鎮せりは縣社伊奈波神社なり五十瓊磯
城入彦命と祭ふ境内にも櫻楓乃木朽なく春秋乃あり
更つてよゝ、後を東北に修りて一峰高く聳えたるハ
古城址あり今俗に金華山やつて神社乃あり
を稻葉山とつて慣るやとて誤に成峯あり

てとす厚き福葉山一名金華山あり新撰美濃
志にわつるゝ巔ふつる二道あり一七曲口一ち百曲ハ
やつ羊腸乃坂路つり所く東北ハ長良川水のせみ
断岸壁を立た多しやく我々やく要害双はやく又是
とせし古木鬱々しや相濤くたのびく神靈乃氣
に感る可なり奇く異なる勢ある山なる峯に
登ると天守臺ありの迹ありは遙方うらやま
郡邑の位置山川の景致眼下に見えり遠くは且
寅乃の加賀の白山寅卯乃の小信濃れ駒の嶽

嶽東濃乃惠那山と望み辰のうゝに尾張乃二宮山本牧
 山申商のうゝ伊勢乃多度山西に近江の伊吹山雲間に
 顕る北と長良川乃あり方縣郡乃山にうゝ
 遠く見す南に顧れ侍努乃海尾張の如多乃浦く
 之御や極る所を如くす減にの山地形をくして眺を
 なるにありし中古織田右府は要害を修り西征の功甚
 甚と茲に聲を竟ふ天下に亂と靜を帝室を安む
 につく不幸にうゝと乃志つ終る御一朝職居れ
 たるに又亡ひあ跡まると業と繼つ能く古城を

ち〜〜蓋て僅に残る礎をく若む木葉う埋み
 嵐にむよ松乃拜あてまき多すれそのもれとあり
 きにまねき世れゆりきり

此福葉山乃城は建仁中二階堂山城守藤原行政始て
 之れと築く星霜を経て永祿中 信長尾張より為城に
 移りて十二年居住あり其後信忠信孝や二代は城
 小居位一信孝天正十一年柴田勝家と同時豊太閤
 亡りて其の遺事大なる所の時信孝
 たるははれりては所持あり山の手をくす由り

こよみまれう〜天正記に記るる中平經て及信忠乃
嫡子秀信初名三法師元文禄元年豊太閤乃より
あ〜備前乃主とす〜岐阜中納言とす〜
去りぬに慶長五年石田氏に與〜関東勢の爲り
攻落され秀信高野山上誓居を同七年此城と毀る
加納に移るまき梨

福葉山ハ因幡國小同名此山あり古今和歌集〜題去
らず在原行平朝臣立口の終いなり山のふもとに
まの〜さゆり今つとちあ〜あるは古人の信〜

美濃此誌〜或は因幡國此等〜
ま〜な〜
ハ山

岐阜志略云勅撰名所集類字等
宗祇の説美濃に治定とす

伊奈岐山因幡す美濃と見え井蛙抄に伊奈岐山美法
因幡両方に乃美濃ハ福葉や書はなはこり〜
前記や見え銘巴法師乃建保名所三百首抄に伊奈岐
山美法と見え〜中昔〜美法乃の〜
多〜按〜伊奈岐山平朝臣乃見え伊奈岐山乃
國れ〜

て奉詔にいづるものなり

小一條殿駿河ふらみぬたるにのりていせ侍た

いぢり山といはれぬ

藤原實方朝臣

家集

ちよふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た

此哥と新撰美濃志にむすぶるやゆれ山は美濃の地名とて合たることす
とて美濃國安八郡結村にむすぶる計りて若く人のあはれ可なり

美濃のふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た

戸まひてたふりていせ侍た津守國基

家集

まひてたふりていせ侍た津守國基

美濃のふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
堯孝法師

家集

ふの美ふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た

二條良基ふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
小島の行の屋も坊

あふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た

都れたの美ふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た

ちよふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
一本

一條良基ふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
二里は

山にけふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
道あり

けふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
伊奈波社の伝記に

ちよふふとぬる力山をうけぬはちてつるふりていせ侍た
二首

藤原實隆の濃路北行に九月廿二日雨のちけりて
 ありしつものけりてなまじしをりる家屋の城郭の
 見ゆるにふゆの宿山とていふもいふもいふも
 ありしつものけりてなまじしをりる家屋の城郭の
 見ゆるにふゆの宿山とていふもいふもいふも
 仁和寺僧正尊海の吾妻の道記につはは山のやまや井
 のたつくる所と一日逗留し宿山とていふもいふも
 なまじしものけりてなまじしをりる家屋の城郭の
 見ゆるにふゆの宿山とていふもいふもいふも

世乃中の人いふまはるるおちあつていふゆの宿山とて
 去は天文二年の記ありて其より井れ口やつて今ぬは阜
 の内東北へいれる地なり

觀岐阜城跡懷古作歌 并 反歌 萩原廣道

五五百櫓城田乃松ほこり利蔭れみまもて世はまはるる
 といひ清きまのりつたのまらあつたらとていふもいふも
 百ちね美濃乃まの持ちいふもの山ふ天をまなつ城とつ
 くと國形と遠くゆかるといふもいふもいふもいふも

何れ小京への道は天皇より御坐敷に天下を治むる
ひらひらゆきぬれいひゆきかきく長良川ありけり水はあつし
おぼえに又山にのちきれた橋をけりあつしいひききせし
て岩のひりくき道と切通しきり用き谷うけりきり
ゆき水とあつしやきつゆきくき谷とく見峯あつしきり
てとくくの高殿とたきあつし乃夫余をわすれりきり
あ代ききとくくきりきりきりきりきりきりきり
しと空禅は世を治るるもわりの御いぬありあり
の末きわいひきり岩板に夏草きりきり松うんきりきりきり

まはりしきりきりきりきりきりきりきりきり
あそころきりきりきりきりきりきりきりきり
まじりきりきりきりきりきりきりきりきり
たつた城のりきり
あつしきりきりきりきりきりきりきりきり
なつしきりきりきりきりきりきりきりきり
○福葉川昔は長良川と福葉川といひきりきりきり
なつしきりきりきりきりきりきりきりきりきり
なつしきりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

川辺にも山人の家乃天井と修く作置板敷の中より
きて水也れ時ち其上にのちもぬふとも炊くありとせ
りえ又伊奈波神社縁起に載るる明神の難行法師
りて好ひし哥

此縁起延文四年九月正四位
下卜部宿禰兼前の奥書あり

伊奈波門庭より次玉の石をくもく油のぬれを

○船伏山鏡岩あやつし所これの川をいれりありし

にふみ合せり波舟遠まはるる浪岩の
舟もてふ抄初めりまゝ尾徳橋に長

村おつきたる尾徳村の南のうゝ長衣川に架りきり
よ今いたる事と世にあらはれ長衣の松橋をのけて

長衣川と虹乃に橋よりなりありありに
所のうゝ乃松をうもをせつ

衣笠内大臣

夫木抄
のりそまにひしつりつるる鷹はよこの橋を造りし

一條兼良公

藤川記
たのむこれあつたきれたりきのをさなり

美濃奇觀卷上 終



